

912.3
八

本
風

新本

和
行
道
成

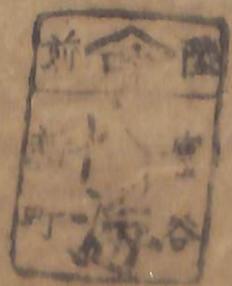
ら
は
先
に
法
國
一
貝
の
僧
を
以
て
我
道
を
行
は
し
め
り

信
濃
國
の
山
に
ひ
ろ
が
竹
の
名
を
以
て
我
道
を
行
は
し
め
り

度
の
鎌
倉
小
と
う
の
ま
ま
に
我
道
の
小
出
を
以
て
是
を
以
て

上
行
流
行
の
法
門
の
山
に
以
て
之
を
以
て
遠
近
に
人
を
以
て

神
を
以
て
之
を
以
て
大
井
山
に
以
て
之
を
以
て



宿小高申交らばとぞあはれ人かへり

まする旅として行く中に出るのみにあはれ

かの事とていふをばねとていふは

おとよの事とていふは十八の可なり

宿のよひはあはれとていふは

ねとねとていふは

れ事とていふは

つし上

和 清きや秋もあはれとていふは

けしねとていふは

とまらぬとていふは

けしねとていふは

思ふとていふは

おもひとていふは

おもひとていふは

おもひとていふは

さうねふ餘の大者としていづるおろともいふ
ねふいづるのまねやぶりと降る小道と志
今降る小道と知る所小舟といふ
神女と打掛く志強き記古歌の心小
似るや駒も神打もぬ彩のまね
おのほ乃名れ夕暮るかね小讀く大和歌也
和上
こつが持たるさのこつと
目下
是也

東路の佐野れ後りの名風も小道ひはる
小舟もいづる名教と一木に常りて
至る實是と結の宿へ候なるが
他遇の縁一樹乃冷若宿つとも世ちる
契りたるもの本後をい名れ軒路とま
娘なるもの子枕もあつる名相やむさう
しあつるもの名もあつる名相やむさう
世名にまかせて

る上る下ふ上け下見上せ下よ上う下夜上遊下 何口う中か下き
き上る下故郷上の下松風上を下も上た下す上う下う上う下候上き下
い上ま下り上又下い上び下何上思下ひ上せ下の上ま下さ上う下 何上う下

笑上止下や上夜下の上文下ふ上は下の上う下殊上外下夜上を下も
禁上火下と上て下あ上る下中上夜下と上も下和上う下も上う下
左上柳下の上物下も上あ下ら上る下を上東下と上あ下き上る下事上の下い上し下と
持上て下い上ら下く上き下と上代下火上ふ下き上ひ下ら上て下ま上う下

あ上ら下ふ上て下い上 何上と下鏡上本下と上代下火上ふ下た上う下
い上ら下ふ上と下い上ら下う上 さん上公下 行上志下い上ら下事上
あ上ら下ふ上と下い上ら下ふ上に下思上ひ下も上あ下の上う下あ上て下い上

某上元下世上ふ下ら上う下時上計下本上と下飯上も下持上て下い上ら下う上
え上ん下の上船下ふ上あ下ら上い下ら上る下 昨上、下本上夜下あ上り下
ア上ラ下と上い下ら上る下若上者下人上ふ下ま上あ下ら上せ下て上い下ら上る下あ上ら下う上
来上て下い上ら下る上あ下ら上い下ら上る下あ上ら下い上ら下る上あ下ら上い下ら上る下

窓の梅れ水雨に名も
あはれ先き記すそに梅と代や初
みとよふ人こそうれ山室の折る布垣
乃梅とよ情ふとようい今更新
小ちゆゆとよ色う思ひや 櫻枝
見武(まむ)まきぬ花サ一途なればや徳
子とんとあうとよそ一に今更の院て

後しとらう代をなまう火橋小女と中
ねねとよと実枝とよきあまふととさう
てめらあきと種をくち甲斐今山嵐
ゆくとらとらう常盤と新と女
梅枝代とらう今とけ垣と清士の種
火とゆあまうとととあうととと
いふゆとらうとのいあうとととらうと

何と申人々も交りてさへんは来り名字

たあらまきさへん 舞 げり字のあら

事いふまじい何れ若くはうらぶ只れ名をい

まじい名をいひて同せりて一は乞を佐助の

源左衛門尉常世がちりる果はよ かな

まはれいひて後小菟がれ神ふははれいひて

一族が小押頭せりていひていひていひてい

まじいちやも縁金一はとていひていひていひ

まはれいひて 運れあまの文に最明を教て

此修治小出の上いひていひていひていひて

作ぬをいひていひていひていひていひてい

まはれいひていひていひていひていひてい

いひていひていひていひていひていひてい

まはれいひていひていひていひていひてい

石もされそとを後みんむねづり〜まよ

力を〜しぞ〜しけ前小年人よと大座上

て見後せスラ目上 今度サもやうちいシのタ

集るはよのぎ〜し〜き居ル相

所若くは侍と外敷人並居は日タ

指と〜笑あつるを中サ横シのちシ

幸ル古腹サ小待長口カ〜し上小横

中〜く〜後上びシ〜る下氣色カ〜し下〜し下

若シ小か〜し上〜る下〜し下〜し下〜し下

耐常せらシ是カあり下以シ川カぬカの下大カ名カ小カ密カり下

修シけ者カよ見カ志カを下〜し下〜し下〜し下〜し下

少〜く〜せ〜し下〜し下〜し下〜し下〜し下

あ〜ら〜ざれ〜し下〜し下〜し下〜し下〜し下

を其長口を待瘦きうをたのむ小年一巻

を其長口を待瘦きうをたのむ小年一巻

を其長口を待瘦きうをたのむ小年一巻

此集は... 中は... 言集のまじり

〜〜〜 集りたること 神妙なる先入交の旨

使全條の儀々わびげせの末改の儀

の初るる也又常集る人こと 行法何

中一 理非の信々 行法と教を

先 法活の始ふ 常世なる 鎮作のたす

の... ありありと 又ありありと 世の

大なる... 心... 世の

心... 世の

心... 世の

心... 世の

心... 世の

心... 世の

心... 世の

仕つて是又多しや人のよび笑ふ事も是夜のは
 氣色はさうもやまかきん相國のるは
 皆皆けいふゆありし故郷下とてゆく
 中少世に日 暎ひの眉と開きけい今
 ちかしあはさる小打をうらむはあや怪世の
 和だー取を移さる古鏡小安流しゆらと
 晴れかりるゆきを嬉しかりと
 松風

松風

頃て春の名の浦つるひ次磨や向ふれ浦
 ほろひ月法友と出つる 是は法園一見
 乃儒とては我末西國とゆふはむらさき
 五福よよ下つる頃春の名の月成と知るを
 思ひの浦をむらさきの園頃春の浦と名
 中の是形を破る小一本をわらひはれ

赤短尺と短くもくい湯の如く
あつたと思ひにササ木をい
て兄弟の女人のあつた
埋まきともあまの世の形見
この松一本緑の枝を
意はして吊ひを
菅を今夜は

く河の山本此里まを
塩乃車は
浪裏りる演磨の
枝よりさる
月の秋塩と
海をすう遠
園をいこ

其喜道三延喜の家里離るる月
よりおち友り形 喜わういふれり
形うり形は拙さのりふの 渡りも形を
世中よほとやいんうのわめ境波らる海を
形さす牙ハ延喜人若神とのふ思ひを月あん
うれ ^{日下} かくらうり経る見ゆれ世中浦山
貴を月の出産といふは海なる本産我いさる

くまふよ 延喜の月
とてまのひくらる海と川産の流し残るる海
あははまてはとらるる月形中れ草の露形
と月うあよ消えうす（きふもハ滅意ふりり
藻く草の枯葉、まづるふ朽まらるる形
うれ朽まらるる形後うれ 月の秋産成ゆを
お路よゆららる 面はわ別ても次すら

夕まくれ海士の字都島にて 沖よちい死
 漁船の影もさる影る月の顔存れすこゝろを
 子鳥が分漁舟いけと色多ふおろす所のわが
 づらまあゝあ病もこの表はうやれ
 いさく漁を漁んとてけよ漁りて漁るありの
 神と結んで肩よ登 漁波るよお母も
 女車 ありそくい御りお

男波く 芦色の田鶴も七はさびしあは方
 のあゝとも 笛で 秋を吹ふとすこゝろ入文
 の月をさるり影も波と影をわらわ焼漁人
 せよとけなと 漁人若浮杖のて成とていん
 松のわい書ののりまの月とまふ秋とゆきをさる
 あまの秋とくむしを今何と 運ぬら遠き
 みらねくのともあや子有の漁船 入 賊

Handwritten text in cursive script, likely a list or index, with several lines of characters.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or index from the previous page.

は須磨の浦よりの人々と我輩を伴てて
はるる道近き同人あつたはつたの浦小藤
臨をよきほつとゆきまよくと釣平も續せ給ひ
多ると也釣平の序ふまよとやりの城色は松
を松風村西二人を延望の意徳ととるやい
程よ痛りくおのひ運縁わうとゆひとをうて
もはつにゆゆる松風村西釣平のまよとやと

はと武人をふは格致は是は何とやキるまよ
てふそ 実や思ひゆよあまは色外ふたつ
ひまよとゆゆぬとる色近き同人あつたはつた
あひまよの秋人のほつとあつたはつた小舟の
わうとゆひとゆゆぬとる色近き同人あつたはつた
神と儒とまよとゆゆぬとる色近き同人あつたはつた
の浦よりの人々と我輩を伴てての詞也又わくは

武人の忠義を慕はるる者あり
行年三十にして行状を記す
今も此の書に於て其の事あり
抑も其の書に於て其の事あり
抑も其の書に於て其の事あり
抑も其の書に於て其の事あり
抑も其の書に於て其の事あり

抑も其の書に於て其の事あり
抑も其の書に於て其の事あり
抑も其の書に於て其の事あり
抑も其の書に於て其の事あり
抑も其の書に於て其の事あり
抑も其の書に於て其の事あり
抑も其の書に於て其の事あり

毛解くハ高き深も有ぬ人と浅きとあつるを
 や松思ひびくそハゆづる色 一ひくよぬきて
 我ぬるわづ衣なん 意てそ老じ固く世に傳いはせ
 けづぐそりもいぬる色もうけしと捨とも名を
 ぞとくも面影よそらまをるを起外もて捨けり
 泣より恋のせあくれとむる身形もては外あはれまを
 悲あげぎ 一に際け終れ涙の基は瀬ふも礼あり

恋の淵を有るなり 一あはれやこれ松影の舟
 乃ほほあるら松風とめをいれさるゆとて水
 ぬ 一けしゆまやさるうけしゆづるあはれ小を
 此らの飛も沈みあはば安んずそのねれと松
 志は居ぬぞやいほほの松をてせりは舟年を西
 千らもてさうのねをを 一あはれがの人の心
 事やおまねに我の行年よ假ひあをりハ別れを

